

最後に余談になるが最近完結した Flora Europaea の第一巻中タヌキモ属の項は大家テイラーが担当執筆しているが、同氏は欧州産ヤチコタヌキモ(*Utr. ochroleuca*)の部分で同種をコタヌキモとヒメタヌキモの交雑種ではないかとする大変面白い見解を発表しており大いに興味をひかれたことを付記しておきたい。(1982.7.8)

◎ 図書紹介

G. ブリュンナー, P. ベック著/熊谷孝良訳(1981) 美しい水草の育て方 テトラ熱帯魚飼育シリーズ(2)、126頁、発行所; ワナー・ランバート網ペット製品事業部(〒108 東京都港区白金台3-19-1. 第31興和ビル)

水中におかれた植物は空気中におかれた植物とは光学的に別世界のものであるだけに、いい知れない美しさをたのませてくれる。水草同好の士は何らかのかたちで水草を育てた経験があったり、これから育ててみようとする機会を伺っている。このような人のために、心ならずも良書が入手できるようになったのはうれしい。この本は熱帯魚飼育の趣味者のために西ドイツから出版されたもので、副題には「水槽にふさわしく、扱いやすい水草の育て方」とある。

熱帯域の水草の自生地の写真と説明は量的に限られてはいるものの、一度でも熱帯のどこかの淡水域に足をかけた者にとってはなつかしく思え、その内容は実に正確である。主として亜熱帯から熱帯の水域に分布している約80種類の水草のカラー写真、自生地および植物についての簡単な記載と要をえた育て方が書かれている。カラー写真は鮮明で、かなりの細部形態も読みとれる。図鑑や専門書からは得られない一味違った生態的な情報も数多くもられている。訳本とは思えない程に読みやすく書かれたのは何よりである。片仮名書きの学名のいくつかについては、訳者が意識的にラテン語の発音に忠実にそったものとしたために、平素われわれが耳にしている発音とは異なる。国際学会で使われている学名は、使用者それぞれが関係する国語に由来した発音でなされるものが多いが、共通した発音でなされるものも多い。やはり聞きなれた発音がよからう。

西ドイツは陸水生物学のレベルの高い国であり、特にアマゾン水系に関する研究業績は世界的に定評があるだけに、本書の内容は水生植物培養の立派な入門書である。趣味的知識と学問的知識の隔たりが少しでも小さくなる

ことは実にすばらしいことであることも、この一冊の本から強く感じたのである。(1982.5.31記)

千葉大・理・生嶋 功

※ この本は、一般書店では扱っておらず、熱帯魚店で入手できる。直接発行元へ注文される場合は、価格2,800円に送料300円をそえて、現金書留で申し込まれたいとのこと。(角野)

○ H. Mühlberg "Das grosse Buch der Wasserpflanzen" (Verlag Werner Dausen, Hanau, 1980, 408 p)

アクアリウムや池で水草を栽培する人のための本だが、栽培に成功するためには水草の生態や生理をよく知らねばならないということで、水草の特性について詳しい解説をしている。第1部「水草の生物学」は90ページに及び、手頃な水草学入門となっている。第2部では、分類群ごとに形態や分布・生態にふれ、栽培の手引きをしている。ドイツには類書が少なくないが、この本は内容的にもよく充実していると思う。(角野)

○ O. P. Gupta "Aquatic Weeds: their menace and control" (Today & Tomorrow's Printers & Publishers, New Delhi, 1979, 272 p)

水生雑草のひきおこす諸問題、その防除のために試みられるさまざまな方法の紹介と評価、そして、水生雑草の利用にもふれている。水生雑草が重大な問題になっている当事国で出た本だけに、内容も具体的である。引用される例はインドのものが中心だが、水生雑草学の課題を要領よくまとめた基本的教科書といえよう。39ページにわたる文献リストも大変参考になる。

(角野)

○ B. Gopal & K. P. Sharma "Water-hyacinth (*Eichhornia crassipes*): the most troublesome weed of the world" (Hindasia, New Delhi, 1981. 128 + 91 p)

世界各地で問題になっているホテイアオイのモノグラフである。分類、形態、生態等についての従来の知見を整理した上で、そのコントロール及び利用に向けてのさまざまな試みが紹介されている。そして、人間とホテイアオイの共存を目指して、今後の研究を進めていく必要性が指摘されている。末尾にある1457篇の文献は、ホテイアオイに向けられた関心の大きさを改めて知らせてくれる。(角野)